

方城大非常の慰霊碑に導かれて

祭り当日の8月4日、慰霊碑の前で手をあわせる若者たちの姿がありました。大正3年12月15日、日本史上最大の炭鉱爆発事故「三菱方城炭鉱 ガス炭じん爆発」が発生。671人ももの尊い命が失われました。かつて、坑内災害を「非常」と言った筑豊で、「方城大非常」と呼ばれた大災害でした。福圓寺(伊方)に納められている犠牲者の位牌にも「横死諸霊」と記され、突然命を奪われ非業の死をとげた無念の思いが「横死」の二文字に込められています。

しかし、今では「方城大非常」の発生から104年がたち、悲惨な事故のことを知らない人が多いのも実情。「方城山神盆踊り大会」を主催した大石勇介さんもその一人でした。慰霊碑がある山神社跡のそばにあった町民プールで子どもの頃よく遊んでいた大石さん。進学・就職と福智町を離れ、気付いたときには町は合併。7年前、京都から帰省した際、久しぶりに目にしたのは荒れ果てたプール跡地でした。「またこの場所で人々が集うイベントをしたい」。そんな思いから草刈りや掃除を始めたある日偶然、慰霊碑を目にします。何の碑か調べたところ「方城大非常」の事実を知り、胸が熱くなったといいます。

地底のヤマの魂にささげる若者たちの祈りと唄

2年前、大石さんが友人である瀬川信太郎さんとプール跡地での音楽イベントを企画。しかし「方城大非常」で亡くなり、地底に埋もれたままの人が多くいることを知り、犠牲者をしのぶ盆踊り大会にしようと取り組みの方向性を定めました。

かつて旧方城町で、社会福祉協議会主催の盆踊り大会が行われていた頃に口説かれていた「方城非常唄」。その事故の悲しみを込めた唄の存在を知り、当時の貴重な音源テープを元に大鼓と唄で再現。平成30年8月4日、十数年ぶりに復活した方城地区の盆踊り大会で、約40年前に途絶えた非常唄が、慰霊碑のそばで響き渡りました。

来年も再来年も続けていきたい

慰霊碑を発見したとき、この地で必ず盆踊りをやるべきだと感じました。やるからには一回で終わるような取り組みにはしたくありません。「来年もここで会おう」と言い合えるような行事に、町の人と一緒に育てていきたいです。



郷土玩具「山響屋」店主
瀬川 信太郎さん
(福岡市在住・長崎県出身)

特集 ここまでまた、めぐり逢う。

熱い思いが引き寄せるつながりのチカラ。



Chapter 1 方城山神盆踊り大会

かつてにぎわいを見せていた方城地区の盆踊り大会の復活を目指した若者たちの挑戦



Chapter 2 バンブースペースプロジェクト

何もない竹林を壮大なイベントスペースに変えた若者たちのつながり

——2つのイベントの実現と人々の思いにせまる。



今を生きる子どもたちに伝え残していきたい

子どもの頃、両親や友達と訪れた地元の夏祭りの思い出が今も強く心に残っていて、何か次世代の子どもたちに残るイベントができないかとずっと考えていました。そんな中「方城大非常」の事実を知り「地元のものとしてこの歴史を風化させてはいけない」と、慰霊の思いを込めた盆踊り大会の復活を思い立ちました。

数多くの尊い犠牲の上に今があることを語り継ぎ、この夏祭りを来年、再来年と回を重ねるごとに地域の絆を結びつける行事にしていきたいです。十数年後、今の子どもたちが大人になったとき、この場所が彼らの思い出の場所になっていることを願っています。

合併後初、十数年ぶりに復活した方城地区の盆踊り大会。10店舗の露店もつらなり、会場は約200人の町内外の人たちでにぎわいをみせました。久々の再会を懐かしむ地元の人たちの姿が印象的でした。

手打ちうどん飲食店「たぬき庵」店主
大石 勇介さん
(福智町出身)



迎えた当日のイベント開催前、山神社跡にある慰霊碑の前で深く手をあわせる関係者。写真右上は、三菱方城炭鉱の象徴であった二つの竖坑と煙突。